

Title	福沢諭吉のみた父百助
Sub Title	The influences of Hyakusuke Fukuzawa on his son, Yukichi
Author	中山, 一義(Nakayama, Kazuyoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1958
Jtitle	哲學 No.34 (1958. 1) ,p.119- 147
JaLC DOI	
Abstract	Before beginning to learn an European language, Dutch, at the age of twenty-one years in 1854, Yukichi Fukuzawa had studied many Chinese books for five or six years in the classical atmosphere of Confucianism. The mind of young Yukichi had been, in several respects, formed in his teens in this feudal classical atmosphere. Three persons especially made important impressions upon him: his father, Hyakusuke, his elder brother, Sannosuke and his teacher, Shozan Shiraiishi. His father influenced him by the moral theory of the school of Horikawa; and his brother, one of the school of Banri Hoashi, stimulated him to learn Dutch', and his teacher, one of the school of Sorai Ogyu, stirred up an interest in history and economy in young Yukichi's mind. Of these three persons I have only taken up his father in this thesis. Yukichi wrote, in 1878, a letter and a note; the former was a letter written to his father's friend Ritsuen Nakamura, and the latter was a note given to his sons and daughters. In these sentences he drew the image of his late father, Hyakusuke, who died at the age of forty-five years in 1836, when Yukichi was only three years old. I have used his image of Hyakusuke as the key to my research into the influences of his father on him.
Notes	小林澄兄先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000034-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福沢諭吉のみた父百助

中山一義

はしがき

明治十一年（一八七八年）一月二十日、福沢諭吉の許へ山縣悌三郎といふ者が来訪し、中村栗園の信書を齎した。山縣は栗園の縁者、栗園は亡父百助の親友であり、旧水口藩の儒者、当時七十三歳の老翁であつた。栗園は生れは中津、旧姓は片山、藩儒野本雪巖並びに日出の帆足萬里に学び、百助にとつて同門の後輩、十四歳の年下であつた。町人の出であつたので、学問のすぢはよいのに藩中の士族が相手にせぬのを、百助は栗園の人物を愛して目にかけて、大阪在番中も蔵屋敷内に寄寓させて篠崎小竹の塾梅枝舎に学ばしめ、次いで栗園を水口藩に推薦して儒官たらしめた。栗園はその後同藩において重用され、維新の際には勤王家として活躍し、明治二年大参事として藩政に参画し、在職一年、老を以て辞して自適の生活に入り、明治十四年十二月二十日七十六歳で逝つた。百助との間柄は眞の骨肉の兄弟にも劣らず、天保七年百助死去の際は、急遽水口から二十里の道を馳せて、遺族を見舞ひ、また一家を挙げて中津へ帰郷の時には、幼い諭吉を抱いて安治川口の舟まで見送り、「哭福沢氏詩以代祭文」を草して

百助の靈に捧げてゐる。論吉の代になつても、栗園は福沢の家を第二の実家のやうに考へ、論吉も亦栗園を親のやうに思ひ、栗園の亡くなるまで交際をつづけた間柄であつた。

山縣の持参した栗園の信書は漢文を以て書かれてあつた。そのおもむきは、大約次の如きものである。近年日本全国各地に小学校が盛に設けられるが、その規則なるものをみると、専ら技芸を教ふるのみで、孝悌の道を無視してゐる。この有様では将来甚だ不安心であるから、福沢自ら小学教則の一書を著はし、「孝悌の道を先にし技芸以て之に繼ぐの旨」を敘べて、之を当路の貴頭に勧めて実施せしめたならば、世教の一助にもなると思ふがどうか。君は儒の道は嫌ひらしいが、若し孝悌の道を以て狭隘行ふに足らずといふならば、君の嚴父在世の意に背馳し不孝の罪はまぬかれまい。君の父は生前儒学に心を寄せ、孝悌の道の行はれることを欲した篤行の君子であつた。よろしく僕の忠言を斥くるなからんことを希望するといふのが、栗園の書翰の趣旨であつた。

福沢は栗園の書状を読んで、翌日、とりあへず左の如き近況を報せる返書を送り、栗園の申し越しに対する正面からの回答を一応保留してゐる。

昨日は御親屬山縣悌三郎君御來訪、先生の近況詳に拝承、尙御書面被下有難拝見仕候。時下寒氣甚しく候処、益御清安被成御座、珍重不斜奉存候。其後は誠に無申訳御無沙汰恐縮の至、実は内外多事、日一日存じながら右の次第、平に御海容可被下候。小学校則の儀に付高書を賜り、篤と拝見、追て御返事可申上、教則は実に困り候儀に御座候得共、致し方無之、実は教員に当るべき人物もなき処へ、無理に多数の学校を建て、この不始末に至り候事と存候。何れ御返事は追て可仕候得共、御紙面落手の御請迄、早々申上候。頓首。

一月二十一日

福 沢 論 吉

中 村 先 生 侍 史

尙以時下御自重專一奉存候。藤本箭山も去年來病氣、一時は心配いたし候程の処、先づ快方、二子は東京寄留致居候。

母も先年來当地へ迎へ居候処、去明治七年五月病死、姉三名の内兩姉は中津住居、中姉は中上川彦次郎の母にて母子共東京住居、彦次郎は即ち私の姪にて、当年二十三歳余に相成、四年前より英國へ執行遣し、旧冬帰國、相応に學問も上達、私の為には大に助力相成候儀に御座候。二男四女有之、長男は十四、次男は十二歳、執行中なり。私も生來の年月を計れば正味四十三歳に相成、旧曆なれば四十五歳と申年にて、即ち亡父百助死去の年齢に御座候。前申上候通り劣姪帰國に付ては、今後少しは私に余暇に出来可申、折々御尋問も申上候積り、尙当地相応の御用も御座候はば無御遠慮被仰聞被下候。以上。

福沢は右の返書を出してから、四日後の一月二十五日付を以て、すこぶる長文の答書を更に栗園の許に送つた。この長文の答書は、書信の形式をかりた福沢の教育意見であると同時に、亡父百助を偲ぶ興味深い文章でもある。この答書は同じ月の「民間雜誌」に栗園の書翰とともに掲載されたところから察すると、当時の一部保守派の教育意見に対する福沢の正面切つての回答であることがわかる。

維新以来の教育に欠典ありとすれば、それは生徒の急増に比して、よく任に堪へる品行よき教師の数の不足に由

来するとみるのが福沢の見解である。この欠典はそれ故に教則の改訂などで補へるものではなく、当路の顯官を一二動かしたところで革まるものでもない。要は現在の学則を益々充実し、他日教師の品行の進むのを待つて、此の学則の活用されることを期するより他はない、といふのが福沢の意見の大概である。

また、孝悌の道を非とするものではないことを明らかにして、次のやうに述べてゐる。「生固より孝悌の道を非とするに非ず、人類の品行に欠く可らざるの一要事として、之を重んずるは少年の時より今に異るなし。然り而して其これを重んずるの心は特に生に限らず、天下の人心を平均して必ず生が心に等しき者多からん。仮令ひ或は自ら孝悌を行はざるも、他人の之を行ふを見て心に悦ばざる者はなかる可し。則ち不孝不悌は人心の惡む所と云て可なり。天下一般の人心に於て之を惡む、何ものかよく此勢に敵す可きや。早晚世論の帰する所なきを得ず。」栗園の憂ふる将来の不安心に対して、福沢はむしろ人間の本性の上からこれを樂觀してゐる。

次いで、栗園がその忠言に従はぬならば、君は不孝の罪をまぬかれぬと、詰問したのに対して、福沢は答へて曰く「先生又謂らく、若生孝悌の道を以て狹隘行ふに足らずとせん歟。家敵在世の意と背馳す可しとて、責るに不孝の罪を以てす。生は不孝の名を聞くも戦慄雷ならざるなり。生不幸生れて十八箇月にして四十五歳の父を喪ひ、一兄三姉亡父の容貌をも記せざる者は生一人のみ。雷に天下不幸の子たるのみに非ず、同胞五人の間に最も不幸なる者なり。既に生前に於て、釐毫の孝を竭す能はず、尙死後に在て、之を辱しめることなからんこと、朝暮片時も忘却したることなし。四年以前家慈をも喪ひたれども、之に事るを得ること殆ど四十年なりしは、又是れ不幸中の幸と云ふ可し。先考の言行は家慈在世の時固より之を聞きて詳にせざるはなし。其品行端嚴方正にして、然も文才の活潑なりしは、生深く欽慕し、深く信じて疑はず、先生も幸に之を許すことならん。先生にして家敵在世の時、経

義を講習し、文章を作為するの意を以て、孝悌の道を行はんと欲する者とする歟。生は即ち孝悌を行はんと欲する者の子にして、深く其言行を信ずる者なり。生は弱冠にして洋学に入り、嘗て儒の奥を窺ふを得ず。加ふるに識淺く才粗にして、未だ道の何物たるを知らずと雖ども、先人の言行果して儒ならば、生は即ち儒の道を信じて疑はざる者なり」と。

右の文中、福沢はまづ孝悌の情は人生の自然であるといふ認識から出発し、この孝悌の情を媒介として、父と自分との精神上思想上のむすびつきを認めてゐる。明治十一年一月二十日に福沢がうけとつた栗園からの書翰は福沢をして上記のやうな文書を書き遺させる結果となつた。福沢は物心のつく頃から、亡父について語る母や長老の思ひ出話に、熱心に耳傾け、年齢相応に父についての人間像を胸に描いたであらうと想像される。しかも、若い福沢の画いた百助の人間像は、年齢とともに変化していつたであらうと思はれる。たまたま、栗園から前記の書翰をうけとつた明治十一年には、福沢は百助の大阪に病死した年齢と同じ四十五歳に達してゐた。栗園への答書の中には、分別盛りの福沢の懐く百助像の素描ともいふべきものが見出される。「其品行端嚴方正にして、然も文才に活潑なりしは、生深く欽慕し、深く信じて疑はず」といひ、また、「先生にして家嚴在世の時、経義を講習し、文章を作為するの意を以て、孝悌の道を行はんと欲する者とする歟。生は即ち孝悌を行はんと欲する者の子にして、深く其言行を信ずる者なり」といひ、更に、「先人の言行果して儒ならば、生は儒の道を信じて疑はざる者なり」といつてゐるのが、それである。福沢はこの百助像の素描について、ひきつづき更に思ひを深めたいらしい。一月二十五日付で栗園に答書を送つてから十日ほど後の、二月五日付で、「福沢氏古銭配分の記」といふ文書を草して、亡父百助の人物性行学識について詳細に書き留め、子孫の記念としてゐる。この記の中の百助像は、先の素描をもと

として、仕上げをほどこしたとみられ、あざやかな浮き彫をみせてくれる。ここに福沢の父百助観は一応完成に近づいたものの如くである。

福沢氏古銭配分の記

汝等の大父福沢百助君は旧中津藩の士族にして、年二十四（三十一の誤記）歳の時より公用を以て大阪堂島の藩邸に住居し、我等の兄弟姉妹五名は共に大阪に誕生し、大父君は年四十五、該邸に於て長逝し給へり。君幼少の時より学を好み、同藩の野本雪巖先生及び豊後の帆足萬里先生に従学して頗る才名あり。独り才学を以て文壇を地方に専らにするのみならず、其天稟温良にして能く物を容れ、思想磊落にして私徳極めて方正、常に人のために畏憚せられたりと云ふ。君の長逝は今を去ること四十余年、余は不幸にして容貌をも知るに由なしと雖も、在世中の言行は之を汝等の大母に聞て詳ならざるはなし。

大父君大阪に住居のとき好んで古銭を集めて楽と為せり。当時大阪の通用銭は、今の銅銭即ち青銭なるものを一文と唱へ、九十六文を錢縶に貫て之を九六の百文と名づけ縶のまゝに用ひたることにて、之を受授するの際必ずしも錢の数を計へず、大凡そ縶の長短を一見するのみにして、仮令ひ或は一二文の過不足あるも之を問ふものなく、又世間一般に於ても殊更に縶の錢を減して利を貪るが如き奸詐も稀なる風習なりき。或日大父君九六の錢縶二三条の内より、古銭幾文づゝを選出して之を取り、其余は又縶に貫て旧の如く為し、之を放却して家人に告るを忘れて外出し、日暮家に帰て錢縶の所在を聞けば、豈計らんや、家人は其錢を九六の全縶と思ひ、当日魚の代に払渡したりと云ふ。

大父君独り大に驚き、其肴屋の名を聞けば生憎平日出入の者に非ずして、家内婢僕に至るまで之を知るものなし。君の憂慮ますます甚だしく、乃ち家人の直に肴屋に接したる者を召し、其年齢容貌の大概より衣服荷物天秤棒の様子に至るまでも逐一聞て詳に記し、竊に藩邸の仲使（藩米を取扱ふ人足）を雇ひ、堂島に来る肴屋とあれば安治川か雑魚場ならんとて、之を物色捜索せしむること兩三日にして始めて本人を見出し、之を家に呼んで自から事の次第を語り、先きの錢縶に不足の錢五文か十文を払ひ、他に又煩勞を謝する為めとて若干の錢を与へて不注意の罪を肴屋に詫びたりとぞ。

此一条は当時藩邸の内外に知る者なし。我々兄弟姉妹も極めて幼少の時のことなれば、假令ひ之を見るも之を解せず、其事情

を詳にするものは唯汝等の大母一人のみ。思ふに大父の性質として、名聞の嫌疑を避けたるものならん。然りと雖も事既に過去に属したり。況んや君の長逝は四十余年の古に在り。余は今日に在て此事実を埋没するに忍びず。啻に福沢家の美に非ず、自から天下道徳の美談と云ふも可なり。汝等生長の後は公然これを人に語て先人の美徳を発揚せよ。又これを発揚すると共に己れ自ら省みる所なかる可らず。此祖父にして如何なる孫ある可きや。汝等は名家の子孫なり、子孫にして先人を辱しむると否とは唯汝等が一心に存するのみ。蓋し大父君は単に正直の一端に依頼して身を立るが如き小丈夫に非ず。壮年の時より藩の会計官吏と為りて大阪の藩邸に在勤し、当時の富豪大賈に近接して財政の衝に当り、或は藩米を売り、或は藩債を募り、金利の高低を論じ、返済期限の緩急を談じ、時に或は金主の歡心を得んが為めにとて共に飲み共に遊戯する等、大阪町人社会の交際に俗中の俗を極めて、恰も二十余(十五の誤記)年を紅塵の間に消磨したるが如くなれども、忙中自から閑あり、一方には深く文事に志して、学流は堀川の伊藤仁齋東涯の経義を悦び、殊に文章を善くして詩も亦あり、野田笛浦の如きは親友中の一名なりき。左れば君の一身は俗吏なり、経学者なり、又詩文家なり。心事極めて多端、思想極めて広くして一方に偏することなく、前記肴屋の段の如きは唯その素質の偶然にも溢れて事に発したるまでのことなれば、此一細事固より以て君の平生を尽くすに足らず。余が持論に於ても人の正直のみを唯一の徳義と認め、畢生の能事終るとして一向に之に心酔するものに非ざれども、骨肉の私より汝等の為めに謀れば、此細事も亦自から先人の言行録中に現はれたる美事の一斑として記念す可き所のものなり。今日幸にして君の生前に集められたる古錢八十七文の存するあり、彼の肴屋に渡したる錢箱中の古錢も必ず此中にあるや明なり。余が年来身辺を離さずして、少年遊学中にも此錢ばかりは大切に携帯したる所のものなれども、汝等も齡漸く長じて数年の後は社会の一人たる可きものなれば、今この錢を分ち其一分を汝等二男四女の間配分して、今後終身処世の記念品と為し、一分は余が坐右に留めて以て修身の宝鑑とすること旧の如くす可し。

福沢の家は本と小祿の貧士族にして余財あることなし。余が相続のとき家に在るものは、唯數百冊の漢書と僅々の書画刀劍とのみなりしが、是等の品も余が勸学中に売尽して学資に供し、今に至つて汝等が為に、先代の遺物としては殆ど一物もなしと雖も、仮令ひ是れあるも今日金を出せば買ひ得べきものに過ぎざれば、之を得ずして遺憾に非ず。独り此古錢に至ては千金を投ずるも買ふべからざるの宝物にして、先人の余光の存するものなり。今余と汝等と共に此余光を被る。遺物大なりと云ふ可し。謹んで此宝物を失ふ勿れ、謹んで此宝物の精神を忘る勿れ、汝等子あらば之を子に伝へよ。孫あらば又孫に伝へしめよ。世々子孫福沢の血統、孜々勉強して自立自話能く家を治む可きは言ふまでもなきことながら、萬一不幸にして財に貧なるの憂あ

るも、文明独立の大義を忘れ、節を屈して心飢ゆるの貧に沈む勿れ。

明治十一年二月五日

論 吉

一 太郎 其 外 へ

右記の中の百助は、俗史と経学者と詩文家といふ三つの側面を一身に兼ね、錢譜のエピソードの如きは、百助の言行録に現はれた美事の一斑に過ぎず、「正直の一偏に依頼して身を立つる如き小丈夫」ではなく、心事の極めて複雑な思想の幅の極めて広い、一方に偏することのない人物として描かれてゐる。人或ひは、これを見て、福沢は百助の人物を理想化してゐると評するであらうが、理想化してゐれば、ゐるで、いかに理想化してゐるか、福沢が百助をいかにみてゐるかといふことが問題である。しかし、われわれの関心は、そこに留まらず、更に一步を進め、その百助観を通して、福沢論吉の人と思想そのものを窺ひ知りたく思ふのである。

俗 吏

百助は俗務を処理して能吏といはれた。文政六年（一八二三年）三十二歳で大阪奥平藩蔵屋敷に御廻米方として勤番してから、天保七年（一八三六年）四十五歳で急死するまで、十数年の長きにわたつて財務の事に勤続したのは、一面において勤直なると同時に、理財の才に長けてゐたからであるといはれてゐる。勤直は以て金穀を安じて依托しうるからであり、能才は以て藩の財政に利をもたらすからであらう。期限の度毎に転勤を願ひ出て許され

ず、十五年にも亘つたものであるといふ。福沢家の家格はこの間に、下士の最上位たる既方格（後の中小姓格）までのぼつてゐる。

福沢家は、百助から数へて二代前、祖父に当る友米といふ人の代に奥平家に仕へ、足輕となつたのが始まりで、やがて小役人に昇格し、婿養子の兵左衛門の代を経て、その長男たる百助が、齡三十の時、文政四年（一八二二年）家督を相続して就いた役目は元締方勘定人でやはり小役人格であつた。百助の代に、福沢家の家格は小役人格から供小姓格を経て、下士の最上位たる既方格までのぼり得たのである。

奥平藩は九州豊前の中津で、祿高十萬石、藩士の身分階級は大別して上士下士に二分され、上士にも数段階あつて、最上級を大身といひ、祿の多いものは二千六百石、少いもので七、八百石を下らず、大身と称せられる家は十余戸あつて、家老とか隊長などの役を代る代る勤め、権勢があつた。後年大身並と寄合格といふ二格ができて、併せて三格と称した。この下に、供番、家中、小姓の三格があつて、俗に平士といひ、大身に次ぐ権勢をもち、祿の多いものは五百石、少いものでも五、六十石を下らず、その戸数は凡そ三百を数へた。

下士には、まづ既方（後中小姓と改む）、供小姓、小役人の三格があつて、これを徒士と呼び、五百戸あり、その下に組外（茶の間坊主、役所諸職人共）、組（所謂足輕）、帯刀の者（仲間）の三格があつて、これが千二百戸ばかりあつた。これらは総じて、二人扶持、粗十一石乃至十三石位で、辛うじて武士としての名目を保つことができた。右の外に、上士と下士との中間に儒者と医師と祐筆との三格があつて、儒と医は上士に準じ、祐筆は下士に準じた（下毛郡史に拠る）。これによつて、福沢家といふものが、藩中に占める位置が明瞭である。

百助は大阪在動中に、同藩橋本浜右衛門の長女阿順を娶り、文政九年（一八二六年）大阪に伴ひ、同十二年には

長男三之助をもうけ、次いで三人の女子が相ついででき、天保五年（一八三四年）二男諭吉が生れ、一年置いて、天保七年の六月に、百助は亡くなつてゐるのである。下士にして子供の数人もある家計の苦しさが、明治十年（一八七七年）福沢の書いた「旧藩情」の中に次のやうに生々しく描写されてゐる。「夫婦暮しなれば格別、若しも三、五人の子供又は老親あれば、歳入を以て衣食を給するに足らず、故に家内力役に堪ゆる者は、男女を問はず、或は手細工或は紡績の稼を以て辛うじて生活を為すのみ、名は内職なれども、其実は内職を本業として却て藩の公務を内職にする者なれば純然たる士族に非ず、或は之を一種の職人と云ふも可なり」といひ、また、上士と下士との間には、超ゆべからざる溝が厳然と存してゐたことを述べて、「下等士族は何等の功績あるも、何等の才力を抱くも、決して上等の席に昇進するを許さず、稀に祐筆などより立身して小姓組に入りたる例もなきに非ざれども、治世二百五十年の間、三、五名に過ぎず、故に下等士族は其下等中の黜陟に心を関して、昇進を求むれども、上等に入るの念は固より之を断絶して、其趣は走獸敢て飛鳥の便利を企望せざる者の如し」とある。

百助は自ら走獸たるに甘じて、飛鳥たらんことを企てなかつたであらうか。その心中は計り知ることはできない。しかし福沢の述べるところによると、百助は性格的に、財吏たるよりは、本来学者たるにふさわしい人物であつたといふ。前記のやうに財務の才に長けてはゐるが、百助の志はむしろ學問の道にむかつてをり、その学才は他の推重するところでもあつた。百助の學問への志向と、俗吏としての現実とは、一見悲劇的な結びつきをしてゐたもののやうである。

福沢は「福翁自伝」の中でかういつてゐる。「私の父は学者であつた、アマリマヘ普通の漢学者であつて、大阪の藩邸に在勤して其仕事は何かといふと、大阪の金持、加島屋、鴻ノ池といふやうな者に交際して藩債の事を司どる役である

が、元來父はコンナ事が不平で堪らない。金銭なんぞ取扱ふよりも読書一偏の学者になつて居たいといふ考であるに、存じ掛もなく算盤を執て金の数を数へなければならぬとか、藩借延期の談判をしなければならぬとか云ふ仕事で、今の洋学者と違つて、昔の学者は錢を見るも汚れると云ふて居た純粹の学者が、純粹の俗事に当ると云ふ訳けであるから、不平も無理はない。』

「亡父は俗吏を勤めるのが不本意であつたに違ひない。左れば中津を蹴飛して外に出れば宜い。所が決してソナ気はなかつた様子だ。如何なる事にも不平を呑んで、チャント小祿に安んじて居たのは、時勢の爲めに進退不自由なりし故でせう。私は今でも独り氣の毒で残念に思ひます。』

俗吏の勤めと学問の志向とを、右のやうな悲劇的に結びつけてゐるものは、時勢の圧力であり、その圧力のため進退が不自由であつたからであると福沢はみてゐる。しかも、福沢は父百助の心中を察して、氣の毒で残念に思ふといつてゐる。この圧力を押しつけるためには、中津を飛び出す以外に途はないのに、百助には自らそれを断行するやうな氣はすこしもなかつたと福沢はみてゐる。

しかし、百助は封建制度からの脱出を全く念頭に思ひ浮べなかつたわけではない。論吉が生れた時、この子は大きくなつたら坊主にしようといふと父が語つた。そのことを福沢はとりあげて、『中津は封建制度でチャント物を箱の中に詰めたやうに、秩序が立つて居て、何百年経つても一寸とも動かぬと云ふ有様、家老の家に生れた者は家老になり、足輕の家に生れた者は足輕になり、先祖代々、家老は家老、足輕は足輕、其間に挟まつて居る者も同様、何年経ても変化と云ふものがない。ソコで私の父の身になつて考へて見れば、到底どんな事をしたつて名を成すことは出来ない。世間を見れば茲に坊主と云ふものが一つある。何でもない魚屋の息子が大僧正になつたと云ふやうな者

が幾人もある話、それゆゑ父が私を坊主にすると云たのは、其意味であらうと推察したことは間違ひなからう。如斯なことを思へば、父の生涯、四十五年の其間、封建制度に束縛せられて何も出来ず、空しく不平を吞んで世を去りたるこそ遺憾なれ。又初生児の行末を謀り、之を坊主にしても名を成さしめんとまで決心したる其心中の苦しき、其愛情の深き、私は毎度此事を思出し、封建の門閥制度を憤ると共に、亡父の心事を察して独り泣くことがあります。私のために門閥制度は親の敵で御座る」といつてゐる。

生れた子供を坊主にしてまでも、門閥制度の枷から脱せしめようとする百助の親心の愛情は、このやうな形で、生れた子供のために、封建制度からの脱出口を見出してゐる。しかし百助の場合は、少くとも福沢の理解してゐる範囲では、これ以上には飛躍しない。

然るに、福沢自身の場合は、亡父の心中を察して、封建の門閥制度に対して満腔の敵意を示してゐる。そこには強い憤りが感得できる。このやうな怒りの感情は百助の心情には浮んでこない。不平不満をいだいても、その不平不満が憤りにならない。ここに父百助と子諭吉との根本的な相違がみられる。

しかし、注目すべきは福沢の場合においても、その憤りや怒りを、生のまま決して爆発させるやうなことをしないことである。爆発させないで、福沢流にこの怒りを処理してゐる。だから、外面的には父子とも似てゐる如くに見える。福沢がこのやうな自分の性行を省みて、自分の生付であるといつてゐるのは見逃してはならない。「ソレカラ私が幼少の時から中津に居て、始終不平で堪らぬと云ふのは無理でない。一体中津の藩風と云ふものは、士族の間に門閥制度がチャント定まつて居て、其門閥の堅い事は舊に藩の公用に就てのみならず、今日私の交際上、子供の交際に至るまで、貴賤上下の区別を成して、上士族の子弟が私の家のやうな下士族の者に向ては丸で言葉が違

ふ。私などが上士族に対して、アナタが如何なすつて、斯うなすつてと云へば、先方では貴様が爾う為やつて、斯う為やれと云ふやうな風で、萬事其通りで、何でも無い只の子供の戯れの遊びにも門閥が付て廻るから、如何しても不平がなくては居られない。其癖今の貴様とか何とか云ふ上士族の子弟と学校に行て、読書回読と云ふやうな事になれば、何時でも此方が勝つ。学問ばかりでない、腕力でも負けはしない。夫れが其交際、朋友互に交つて遊ぶ子供遊の間にも、ちやんと門閥と云ふものを持って横風至極だから、子供心にも腹が立て堪らぬ。況して大人同志、藩の御用を勤めて居る人々に貴賤の区別は中々喧ましいことで、私が覚えて居るが、或時私の兄が家老の処に手紙を遣て、少し学者風で其表書に何々様下執事と書いて遣たら大に叱られ、下執事とは何の事だ、御取次衆と認めて来いと云て、手紙を突返して来た。私は之を見ても側から独り立腹して泣たことがある。馬鹿々々しい。こんな処に誰が居るものか、如何したつて是れはモウ出るより外に仕様がなないと、始終心の中に思て居ました。ソレカラ私も次第に成長して少年ながらも少しは世の中の事が分るやうになる中に、私の従兄弟などにも随分一人や二人は学者がある。能く書を読む男がある。固より下士族の仲間だから、兄などゝ話のときには藩風が善くないとか何とかいろ／＼不平を洩らして居るのを聞いて、私は始終ソレを止めて居ました。「よしなさい馬鹿々々しい。此中津に居る限りは、そんな愚論をしても役に立つものではない。不平があれば出て仕舞ふが宜い。出なければ不平を云はぬが宜い」と、毎度止めて居たことがあるが、是れはマア私の生付きの性質と云ふやうなものでせう。或時私が何か漢書を読む中に、喜怒色に顯さずと云ふ一句を讀で、其時にハット思ふて大に自分で安心決定したことがある。」心中不平を懐きながらも、直ちにそれを爆発させないところは、父と同様であるが、父の精神がどこまでも封建制の内側で働き、けつしてそれを超えようとしらないのに対して、福沢の精神は、これを超越して制度内での榮辱は

すでに眼中にないらしい。そこでは心中に発した憤りは、やがて単なる憤りではなくなつて、一段と高い次元に昇華してゐるもののやうである。「既に心に決定して居れば、藩に居て功名心と云ふものは更らにない、立身出世して高い身分になつて錦を故郷に着て人を驚かすと云ふやうな野心は少しもないのみか、私には其錦が却て恥かしくて着ることが出来ない。グツ／＼云へば唯この藩を出て仕舞ふ丈けの事だと云ふのが若い時からの考へで、人にこそ云はね、私の心では眼中藩なしと斯う安心を極めて居ました。」

精神がここまで来ては、もはや中津を出るよりほかはない。二十一歳の論吉は、安政元年（一八五三年）二月、兄三之助の伴をして長崎へ出て、その地で蘭学修業をする機会にめぐまれる。郷里中津を発つ時の心境を次のやうに生々と語つてゐる。「抑も私の長崎に往たのは、唯田舎の中津の窮屈なのが忌で／＼堪らぬから、文学でも武芸でも何でも外に出ることが出来さへすれば有難いと云ふので出掛けたことだから、故郷を去るに少しも未練はない、如斯処に誰が居るものか、一度出たらば鉄砲玉で、再び帰て来はしないぞ、今日こそ宜い心地だと独り心で喜び、後向て唾して颯々と足早にかけ出したのは今でも覚えて居る。」

ところがそれから二年の後、運命は再び、福沢を藩地に繫縛しようとした。兄が病死したため、福沢が家督をついで俗吏に奔走することとなつたからである。中津に釘づけにされ、周囲の反対の裡にあつて、大阪遊学への口実をつくるに苦心した約二ヶ月程の間の心境を、後年「築城書百爾之記」に、「身は中津に居り、心は天外に在り」と述懐してゐる。封建の枠からの解放を求める自由な精神の悲痛な叫びを聞く思ひがする。

百助をして不平を抑えて俗務に当らしめたのが、時勢のため進退不自由なりし故であるならば、論吉をして故郷の中津を飛び出させたのも亦時勢の為せる業ともいへよう。時勢そのものが、すでに違つてゐたのであらうか。ま

たは、これを感じ得する両者の性格の相違に由来すると解すべきであらうか。

百助の急死は脳溢血であつたといはれてゐるが、下僚の不始末の責を感じての自殺であるといふ浮説さへある。(西村天因著「学界の偉人」)。百助の死んだ翌年、天保八年には大阪に大塩の乱が起つて、中斎は同じく四十五歳を一期に自ら焚死してゐる。天保年間には全国的な饑饉が打ち続き、殊に天保七年、百助の亡くなつた年には、大阪市民の困窮はその極に達した。大阪城代のあやまつた処置に対する大塩の憤激は、その翌年二月遂に争乱を惹起せしめたのである。百助は同じ大阪の地に在つても、大塩には近づかなかつたらしい。百助をして中斎に親しませなかつたのは何であつたか。陽明の学風か、はたまた中斎の性格か。

天保は幕末の転期である。時代はこの頃から急転直下に動いて行つた。父は封建制に不平を懐きながらも、その枠の中で忠実に務を果し、病を得て天保七年四十五歳で世を去つて行つた。後に残された生後十八ヶ月の子供は、やがて物心のつく頃には、その枠を敵視して、これからの脱出を念願し、やがてこれが批判と打破とを生涯の仕事の一つとしてゐる。時代の大転換期に生死した親子二代の姿である。

経 学 者

経学者としての百助は、京都堀河の伊藤仁斎東涯の流れを汲むものであると福沢は解してゐるが、百助がいついかなる経路によつて堀河学派の経学に結びついたか、これを明らかに示す資料は現在見当らない。

しかし、福沢は前記「福沢氏古銭配分の記」の中でも、百助の「学流は堀川の伊藤仁斎東涯の経義を悦び」とい

ひ、「自伝」の中でも、百助は「殊に伊東東涯先生が大信心で、誠意誠心屋漏に愧ぢずといふことばかり心掛け」てゐたと述べてゐる。仁齋学の眼目は德行といふことにあつた。德行とは人倫日用常行における仁愛の実践の意味であり、生活体験そのものにおいてとらへられた人倫の謂である。東涯は紹述先生と謚されてゐるほど、経義の上では德行を以て学問の本旨とする父仁齋の説に忠実であつた。このやうな東涯の人柄に、百助はこころ惹かれたのかもしれない。百助はさういふ人柄であつた。百助は東涯自筆のものと伝へられてゐる書入れのある「易经集註」十三冊を大阪で手に入れて、その蔵書目録に「天下稀有の書なり、子孫謹んで福沢の家に蔵むべし」とあたかも遺言の如く書きとめて置いたといふ。

しかし、百助の東涯に魅力を感じたのは、経義の面のみに限らなかつたらしい。東涯は歴史や文学の方面にもこころをむけた、学問的視野の広い人物であつた。経義の学以外にも、「制度通」の如き価値ある制度史研究があり、「助辞考」、「用字格」、「操觚字訣」の如きすぐれた文学上の労作がある。東涯の学問は父仁齋の経義の祖述のみでなく、歴史や文学の方面にもわたつて自分の研究を進めてゐるのである。百助はこころ惹かれたところ惹かれたらしく、「上諭条例」の如き、中国清朝乾隆帝治世の法令を編年体に記録した書を、多年の間探し求めて、天保五年十二月十二日、漸くこれを手に入れて大いに喜び、たまたま、その夜、福沢の家に男子が出生したので、重なる喜びを記念するため、生れた子供に諭の一字をとつて「諭吉」と名付けたといふ話は、百助の学問的関心が、法制や歴史の方面にもむかつてゐたであらうことを示すものである。

しかし、百助が年少の頃従学した学問の師は、折衷学派の野本雪巖であり、また独立学派の帆足萬里であつた。経義において、これら二人の学者と百助との結びつきについては、福沢は言葉をついやしてはゐないが、百助は晩

年に到るまで、この二人の恩師への音信を怠つてはゐない。福沢が百助の學問に及ぼしたこの二人の影響について語らぬことは疑の存するところである。

福沢は「自伝」の中で、百助の學問が、その家庭において、教育の主義となり、やがてそれが父の死後も永く遺つて福沢家の家風として支配してゐたことを、次のやうに語つてゐる。「子供を育てるのも全く儒教主義で育てたものであらうと思ふ其の一例を申せば、斯う云ふことがある。私は勿論幼少だから手習どころの話でないが、最う十歳ばかりになる兄と七、八歳なる姉などが手習をするには、倉屋敷の中に手習の師匠があつて、其の家には町家の子供も来る。其処でイロハニホヘトを教へるのは宜しいが、大阪の事だから九々の声を教へる、二二が四、二三が六。これは当然の話であるが、其事を父が聞いて、「怪しからぬ事を教へる。幼少の子供に勘定の事を知らせると云ふのは以ての外だ。斯う云ふ処に子供は遣つて置かれぬ。何を教へるか知れぬ。早速取返せ」と云つて取返した事があると云ふことは、後に母に聞きました。何でも大変喧ましい人物であつたことは推察が出来る。其書遺したものなどを見れば眞実正銘の漢儒で、殊に堀河の伊藤東涯先生が大信心で、誠意誠心屋漏に愧ぢずといふこと許り心掛けたものと思はれるから、其遺風は自から私の家には存して居なければならぬ。一母五子、他人を交へず、世間の附合は少く、明けても暮れても唯母の話聞く許り、父は死んでも生きてるやうなものです。」

「私共の兄弟は、(中略)他人の知らぬ処に随分淋しい思ひをしましたが、其淋しい間にも、家風は至極正しい。厳重な父があるでもないが、母子睦じく暮して兄弟喧嘩など唯の一度もしたことがないのみか、仮初にも俗な卑陋な事はしられないものだと育てられて別段に教へる者もない、母も決して喧しい六かしい人でないのに、自然に爾うなつたのは矢張り父の遺風と母の感化力でせう。其事實に現はれたことを申せば、鳴物などの一条で三味線とか

何とか云ふものを、聞かうとも思はなければ何とも思はぬ。斯様なものは全体私なんその聞く可きものでない。別や玩ぶべきものでないと云ふ考を持つて居るから、遂そ芝居見物など念頭に浮んだこともない。例へば、夏になると中津に芝居がある。祭の時には七日も芝居を興行して、田舎役者が芸をする其時には、藩から布令が出る。芝居は何日の間にあるか、藩士たるものは決して立寄ること相成らぬ、住吉の社の石垣より以外に行くことはならぬと云ふ其布令は文面は、甚だ嚴重なやうにあるが、唯一片の御布令だけの事であるから、俗士族は脇差を一本挟して頼冠りをして颯々と芝居の矢来を破つて這入る。若しそれを咎めれば却つて叱り飛ばすと云ふから、誰も怖がつて咎める者はない。町の者は金を払つて行くに、士族は忍姿で却つて威張つて只這入つて観る。然るに中以下俗士族の多い中で、其芝居に行かぬのは凡そ私のところ一軒位でせう。決して行かない。此処から先きは行くことはならぬと云へば、一足でも行かぬ。どんな事があつても、私の母は女ながらも遂そ一口でも芝居の事を子供に云はず、兄も亦行かうと云はず、家内中一寸でも話がない。夏、暑い時の事であるから涼には行く。併し其近くで芝居をして居るからと云て見やうともしない、どんな芝居を遣て居るとも噂にもしない。平気で居ると云ふやうな家風でした。」

「マア申せば血に交りて赤くならぬとは私の事でせう。自分でも不思議のやうにあるが、是れは如何しても私の家の風だと思ひます。幼少の時から兄弟五人、他人まぜずに母に育てられて、次第に成長しても、汚ない事は仮初にも蔭にも日向にも家の中で聞たこともなければ話した事もない。清淨潔白、自から同藩普通の家族とは色を異にして、ソレカラ家を去て他人に交ははても、其風をチャント守て、別に慎むでもない、当然の事だと思つて居た。」

百助の遺した篤実勤直な家風と、それが福沢の上に及ぼした影響とは、右の引用に尽されてゐる。百助が経義を

講習し、文章を作つたのも、孝悌の道を行はんと欲したからであるならば、自分も亦孝悌の道を行はんとする者の子であり、父の言行が果して儒ならば、自分も亦儒の道を信じて疑はぬ者であるとは、前記栗園への答書中の福沢の語であつた。更に福沢は自分の子女にも、百助の遺風を残し伝へたいと強く望んで、この希望を具現したのが、上記「福沢氏古銭配分の記」にほかならない。この記の文章の行間に、われわれは福沢の父百助に対する深い敬愛の念を読みとるとともに、百助の遺した何ものにも代へがたい正直といふ家宝を、孫子にも伝へんとする強い意慾を感得することができる。徳行を以て講学の本旨とする堀河学派の流れを汲むものとして、經学者百助をみる福沢の見解は、右様の線から納得される。

しかしながら、福沢の儒学主義に対するはげしい批判、攻撃は周知のことである。そこでは儒学に対する非連続面のみあつて、連続面は存在しないやうにみえる。福沢は「自伝」の中で非連続の模様を述べてゐる。「私は唯漢学が不信仰で漢学に重きを置かぬ許りでない。一步を進めて所謂腐儒の腐説を一掃して遣らうと若い時から心掛けました。(中略)かくまでに私が漢学を敵にしたのは、今の開国の時節に、陳く腐れた漢説が後進少年生の脳中に蟠まつては、逆も西洋の文明は国に入ることが出来ないと飽くまでも信じて疑はず、如何にもして彼等を救出して我が信ずる所に導かんと、有らん限りの力を尽し、私の真面目を申せば、日本国中の漢学者は皆来い、乃公が一人で相手にならうと云ふやうな決心であつた。」

前には、百助の遺した家風のうちに生育した者として、孝悌の道を行はんと欲する者の子であると称し、儒の道を信じて疑はぬといつてゐるのに対して、ここでは天下の儒者流を目のかたきにして、儒者のすることは一から十まで皆気にいらぬといひ、日本国中の儒者を相手に論戦も辞さぬといふ。この矛盾撞着は果して福沢のこころの中

でどのやうな形で結びついてゐるのであらうか。前記栗園に対する答書の結尾に、その間の心境を述べて余すところがない。

『先生が生を目して太だ儒を喜ばざる者とするは蓋し亦其由縁あり。今を去ること二十余年前、生が洋学に従事したるは固より天下の人心に背くのみならず、親戚朋友と雖ども之を喜ぶ者は甚尠なし。唯先此亡兄の許諾を得て竊に苦学し、漸く其一班を窺はんとするの時に当て、攘夷の議論天下に蜂起し、洋学者流の如きは歎視せらるるも習ならず、甚しきは一身を容るるに処なからんとするの勢に至れり。学を勤めて聞達を求むるは、古今の常態なるに、当時の洋学者は勉めて、其姓名居処を匿さんとするに心配したる者なり。然るに此攘夷論者の流を見れば、多くは儒家の門に出て、陽に孝悌忠信の旨を唱る者なるが故に、生等の如きは其唱る所の旨を聞くに違あらず、只管之に遠ざからんことを求めたるのみ。攘夷の論も国権の論も、其元素に至ては固より異同あることなし。生等が国権の大義を主張するの心は二十余年来に毫も変易せず。今後死に至るまでも一様無変を期すと雖ども、唯如何せん当時の攘夷論と洋学者とは其相容れざること水火の如く、他に向て弁論するの暇を得ずして暫く之を避るの道に出でたるのみ。故に生は儒の道を喜ばざるに非ず、当時儒者流の人を喜ばざりしなり。之を喜ばずして之を恐怖したるなり、之に遠ざかりて之を避けたるなり、是即ち生が儒を喜ばざるの名を得たる由縁ならん。然りと雖ども事既往に属したり、今又何をか論じ、何をか思はん。洋儒混同して殆ど背馳の痕を見ざるは、天下の幸福と云ふ可し。唯今日に在ては学問を勤め、品行を脩るに汲汲たるのみ、他人を教導薰陶するが如きは敢て望む所に非ざれども、我心身の所在を失はずして祖先以来正潔の家風を存し、口に先考先此を辱しむなからんこと生が終身の心事なり。但し父母を辱しむることなからんを欲して、自から恥ることの多きを如何せん。諒怒是祈る。』

右の答書中に、「洋儒混同して殆ど背馳の痕を見ざるは、天下の幸福と云ふ可し」と述べてゐるが、慶応義塾の教育の実際における、この洋儒混同、殆ど背馳の痕を見ぬ好適例を、福沢は「自伝」の中に披露してゐる。「世間では漢書を読してから英書を学ぶと云ふのを、此方には英書を学んでから漢書を学ぶと云ふ者もあつた。波多野承五郎などは子供の時から英書ばかり勉強して居たので、日本の手紙が読めなかつたが、生れ付き文才があり氣力のあつた少年だから、英学の跡で漢書を学べば造作もなく漢学が出来て、今では彼の通り何でも不自由なく立派な學者に成つて居ます。」

学問修業の順序として、右の福沢流の行き方は明治時代における一方の意見を代表してゐたのである。經義についてのみならず、福沢は詩文についても、同様の考へ方を持つて居た。「方今の時節、フヒジカル、サイヤンスを勤めてもなほ振はざる折柄、その塾中の社員が詩文集を版にいたしたとは、咄咄怪事、老生はこれを聞いて恥死せんとす。何等の馬鹿が右様のタワケを企てたるか」といつて、軽々しく詩文をもてあそぶ弟子を戒めてゐる。科学的精神を先づ養ひ、然る後に漢書を読むも詩文を作るもさまざまたげなしといふのが、福沢の真意と解してよからう。そこには、一方に偏らぬ寛容の精神の存するをみのがしえない。

詩 文 家

百助は二冊の詩文集を遺してゐる。「杲育堂詩稿」と「霏芳閣文章稿」とがそれである。以つて詩文家としての

百助の一面を窺ふことができる。前者は文政元年（一八一八）戊寅、二十七歳の二月から、天保三年（一八三二）壬辰、四十一歳までの詩を載せ、後者は天保三年壬辰から、同五年（一八三五）甲午、四十三歳の正月までの文章を収めてゐる。福沢はこれらの詩文から恐らく亡父百助の精神生活のさまざまの陰翳をのぞきみることができたであらう。「福沢氏古銭配分の記」や「自伝」にみられる百助に関する記事の原資料かと思はれるものをいくつか数へることもできる。前記栗園の諭吉に寄せた書翰中には、百助について「好講習経義、作為文章、居恒曰非聖經、則不能知道、非文章、則不能伝其意」と記してあるが、以て百助が文章について懐いてゐた考への一斑を知ることができ。しかし百助の詩文についての考へは、けだし右の栗園の記事以上のものがあつたであらうことは、百助の詩文集を一見して容易にくみとることができる。百助にとつて、詩文の価値は単に経義を伝へることのみ限らなかつたであらう。

百助に詩文の友として野田笛浦の如き当代に知名の士のあつたことを、福沢は「自伝」等に記してゐるが、笛浦の他に、篠崎小竹と齋藤拙堂とを詩友のうちに挙げてゐる書物（「大分県偉人伝」）もある。笛浦と小竹と拙堂とは、いづれも古賀精里に学び、昌平黌の出身で、とくに詩文を以て世に知られた人たちであつた。精里は寛政三博士の一人として知られてゐる。笛浦は百助より五歳年少、拙堂は三歳年少、小竹は七歳年長であるから、ほぼ同年輩であつた。笛浦は丹後田辺の人、拙堂は津の藩士、小竹は大阪の人である。殊に小竹は生れが豊後であるところからであらうか、百助と特に親しく、百助は栗園をして小竹の私塾梅枝舎に学ばしめ、百助が水口藩に栗園を推薦せんとしたときも、小竹の力があづかつてゐたといふ。しかし遺憾なことには、詩文の上でのこれらの人々との交りを、前記百助の詩文集からは窺ひ知ることができない。詩文集には帆足萬里、野本雪巖、野本白巖、中村栗園その他の

学者の名をみるのみで、右三人との贈答の詩文は見当らぬ。

百助の学才は年少の頃から人の注目するところであつた。百助の学問への執心は強く、殊に早くから菅茶山の学徳を慕つて、備後神辺の廉塾に従遊したい希望をもつたが、家計不如意の爲め果さず、父兵左衛門が藩庁に学費拝借を願ひでたけれども、前例なき故を以て聞き届けられなかつたといふ。文化十一年（一八一四年）、百助二十三歳の八月のことである。

茶山は寛延元年（一七四八年）の生れであるから、その頃すでに六十余歳で、朱顔白髪、一見田舎翁の如き容貌と謙和な学風とが融け合ひ、詩名とともに、その学徳は一世に高かつた。百助が若くしてこのやうな学者を慕つたといふことは、後年の彼れの学問の方向を暗示してゐるやうに思はれる。百助が従学した師は折衷学派といはれる中津の野本雪巖と、独立学派の日出の帆足萬里であつたが、後年経義については仁齋東涯の説をよるこび、詩文の友に笛浦その他の朱子学の徒をもつたといふことは茶山のことと思ひ合せて興味あることに思はれる。

百助はしかし他方また、維新の際勤王の爲に奔走した中村栗園や、萬里の口授せる海防策を水戸烈公に呈するため嘉永三年遠く江戸に馳せた野本白巖の如き感慨ある人物とも、親しく交り、兩人に寄せた詩文はかなり残つてゐる。このあたりが百助の複雑なところで、福沢が百助を評して「心事極めて多端思想極めて広くして一方に偏することなし」といつた所以であらう。

福沢はしかし、「自伝」の中で、百助が笛浦に親しんで、山陽を疎外してゐたことを指摘してゐる。笛浦は「浮気でない学者」であつたからで、百助が大阪にゐるとき、山陽は京都にをり、是非交際しなければならぬはずであるのに、つきあはなかつたのは、山陽の派手なのを嫌つたからであらうと福沢は述べてゐる。山陽は百助に十二歳

の年長であつて、山陽三十歳の時、父の春水が菅茶山と親交のあつたところから廉塾に迎へられて、有名な黄葉夕陽村舎に都講となつてゐる。文化六・七年のことであるから、百助が従学を藩庁に願ひ出た五・六年前のことである。しかし山陽の性格は、茶山の許に長くとどまることができず、「養魚の逆は固より蚊龍の棲むべき処に非ず」といふわけで、僅か年余にして再び京都に去つてゐる。山陽は天保三年（一八三二年）五十三歳で亡くなつてゐる。百助の死に先立つこと四年である。

文章の上からいふと、山陽のそれは人を振るひ立たせるやうなはげしい文章である。東涯の文章は平坦でありながら、しかも言ふべきことは十分に言ひつくした文章である。文章の点からも百助は、山陽をよるこぼす、笛浦等に親しみ、東涯の学問や人柄に私淑したのであらう。時を同じくして大阪の地にとともに居りながら、憤激の人中斎に近づかなかつたことは、前にも述べた。その頃、京都の堀河には、仁斎の曾孫弘濟（寿賀藏）が居たとみられるが、これとの交際の有無については不明である。

百助の一面に文人の風ありとみる福沢の見解をもとにして知りうることは以上の通りである。ところで福沢は次のやうなことを云つてゐる。自分の兄の三之助は父に似てはなはだ多芸多能であつて、福沢の家の遺伝ともいふべきであるに、論吉自身は父にも兄にも似ず、無芸無能すこぶる殺風景であるのは何故か、その由つて来る所以を尋ねて、次のやうに説明してゐる。「元來私は生れ付き殺風景でもあるまい。人間の天性に必ず無芸殺風景と約束があるでもなからうと思ふが、何分私の性質と云ふよりも少年の時から様々の事情がコンナ男にして仕舞たのでせう。先づ第一に幼少の時から教育の世話をして呉れる者がないので、ロクに手習をせずに成長したから、今でも書が出来ない。成長の後でも自分で手本を習ふたら宜ささうなものだが、其時は既に洋学の門に入て、天下の儒者流

を目の敵にして、儒者のすることなら一から十まで皆氣に入らぬ、就中その行状が好かない。口に仁義忠孝など饒舌りながら、サアと云ふときに夫れ程に意氣地はない。殊に不品行で酒を飲んで詩を作て書が旨いと云へば評判が宜い。都て氣に喰はぬ。よしよし洋学流の吾々は正反對に出掛けて遣らうと云ふ氣になつて、恰も江戸の劍術全盛の時代に刀劍を売払て仕舞ひ、兼て嗜きな居合も罷めて知らぬ風をして居たやうな塩梅式に、儒者の奴等が詩を作ると云へば此方は態と作らずに見せやう、奴等が書を善くすると云へば此方は殊更に等閑にして善く書かずに見せやうと、飛んだ処に力身込んで手習をしなかつたのが生涯の失策。私の家の遺伝と云へば、父も兄も文人で、殊に兄は書も善くし、画も出来、篆刻も出来る程の多芸の人に、其弟は此通りな無芸無能、書画は扱置き、骨董も美術品も一切無頓着、住居の家も大工任せ、衣服の流行など何が何やら少しも知らず又知らうとも思はず、唯人の着せて呉れるものを着て居る」

「自伝」の中の右の一節から、さまざまのことが考えられる。福沢は生れながら自分は無芸でもあるまいに、父兄に似ず殺風景であるのは、自分の経てきた境遇の所為であるといふ。たしかにそれもあるであらう。しかし、右の文中に流れる天邪鬼ともいふべき反抗の精神は一面において境遇から生れたものとも云へようが、むしろこの精神は母の側から享けた天性ではないかと思はれるふしが多分にある。「自伝」の中の母についての挿話にはこの事を裏付けるものがある。兄三之助は彼の点において父に似、弟の諭吉は此の点において母に似てゐた。兄三之助が役目の上でも、学問の上でも、与へられた現実を超えず、父と同じ大阪の任地で病を得、その病を養ふため帰郷後間もなく、三十一歳の若さで世を去つたのは、父百助の縮図でもみるやうでいたましい氣がする。しかし諭吉は年少の頃から違つてゐた。兄三之助と諭吉とのものの考へ方や行動の相違には、まさに対照的なものがみられる。こ

の相違の由つて来るところは天性とより考へる他はない。父百助と母お順との性格の相違からくるものと断ぜざるをえない。このやうにみえてくると、諭吉の殺風景は生れつきでないまでも、これに拍車をかけたものは、むしろ境遇の所為もあつたが、その反逆的天性の力が大であつたのではなからうか。

前述のやうに百助が一身において、俗吏と経学者と詩文家との三つを兼ね備へ、複雑な心事と幅広い思想とをもつた一方に偏倚することなき調和のとれた人物であつたと福沢は見てゐる。しかし「自伝」の述べるところでは、百助は学者たらんことを望み、俗吏たることを嫌つたが、時勢のため息むを得ず俗務を執つて一生を終つた気の毒な人であつたといひ、百助の一身において、俗吏の面と経学者の面とは背中合せに対立し、悲劇的な結びつきをしてゐると福沢はみて、封建制度を親の敵といつてゐる。しかも福沢のいふ如く、百助の精神生活が複雑で幅広く、しかも偏らないものであるならば、詩文家の一面が俗吏と経学者との対立を、ある意味で調停する中介の役を果してゐたとみるべきではなからうか。福沢はこの三者は全体としては百助の人格において、何等かの統一乃至調和を保つてゐたとみてゐたらしいからである。

左に「杲育堂詩稿」中から詩三四編を摘記して参考に供する。先考は百助の父兵左衛門。一舎上人は不詳。愚亭先生は百助の師帆里萬里。元日は文政十年の正月。富商某氏はあるいは務の上で交渉をもつた大阪町人かもしれぬ。

文政甲申

九月二十一日

先考忌日看菊有感

悽然早起踏晨霜。客舎秋高籬菊黃。

歲歲花開人不見。對花悲慕旧時香。

文政丙戌

贈一舍上人

奔走黃塵已十年。人間到死利名纏。

羨師一舍双林下。枕簟茶瓜別有天。

奉寄

愚亭先生

不見先生已十霜。山河遙隔說書堂。

歸鄉計拙官途嶮。只恥癡心似旧狂。

文政丁亥

元日作

三歲思鄉淚滿腮。復看春色入窓梅。

今年却喜天涯客。膝下團欒勸酒杯。

文政庚寅

送富商某氏葬

街頭兒女走東西。會者千人道不通。

莫怪浪華富豪權。銀槍橫立夕陽中。

福沢諭吉のみた父百助

福沢は明治十一年、年少時以来二十数年間殆ど省みなかつた詩作を試み、爾来生涯に百三十余に上る詩を遺してゐる。これを老後の楽と称し、八十歳まで稽古したら一廉の詩人になれるだらうと戯れに人に語つたことがあるといふ。福沢の文章については、いまさらここに云ふを要しないが、平易通俗の流儀のうちにも、達意を主とする文章の工夫に平常苦心をおこたらなかつた。書についても亦、少壮時代のそれは、百助のものに似てゐるが、明治十三年頃から、思ひ立つて手習を始め、やがて独自の筆法を發揮し、高い人格と強い気魄をしのぶ墨跡を遺してゐる。明治の一老書家は、福沢の書を評して、「あれは字ではない」といつたといふ。（「福沢論吉の遺風」高橋誠一郎序）。福沢の詩文や書の単なる文人の詩文、書家の書をはるかに超脱せるを道破し得て妙である。

む す び

弱冠洋学に従事する以前の福沢をとりまく漢学的雰囲気が如何様なものであり、またそれが如何様な影響を福沢に与へたかを調べてみようとして書き出したのが、右の一文である。当初の計画では、父百助、兄三之助（附母お順）、師白石照山（附服部五郎兵衛、野本白巖）の三人をとり挙げ、夫々の及ぼす影響が、全体として興味ある関聯をなしてゐるところを明らかにしてみようとしたのである。百助は経義の上で、節義を尊び徳行を重んじる学風を福沢に遺し伝へた点において、三之助は万里の学流を介して、福沢を洋学の世界へ結縁せしめた点において、照山は徂徠学の一派の視野の広い学統からくる歴史の重視、経済への関心を、若い福沢に培つた点において、一応調べるところを調べてみて、これらが福沢の学問を成立させる土台になつてゐる点を明らかにしたいと考へた。しかし、

右の一文は、父百助を取扱ったのみで、稿を改めること数度に及び、すでに予定の紙数を超え、当初の見込と異なるものとなった。三之助と照山については、他の機会に取りあげてみたい。(昭和三十二年九月三十日)